式辞

弥生三月、冬の空気が和み、木々のつぼみも我先にと大きく膨らむ季節を迎えました。　本日ここに、令和三年度松本深志高等学校卒業証書授与式を挙行するにあたり、ご来賓のご臨席をたまわり、栄えある卒業式に錦上花を添えていただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業おめでとうございます。「這えば立て、立てば歩めの親心」と申しますが、親として子の成長を願う気持ちはいつの時代も変わらないことと存じます。日頃のご苦労ご訓育がここに実り、今日この日を迎えられましたことに心からお喜び申し上げます。

さて、ただいま卒業証書を授与した三百十三名の卒業生の皆さん、晴れのご卒業おめでとうございます。教職員を代表して心よりお祝い申し上げます。

本日、皆さんに贈る「卒業おめでとう」という言葉は、コロナ禍の制限の中、工夫して多くを乗り越えてきた過ぎ去りし三年間の精進努力に対する賞賛の辞であるとともに、明日を担う若人への大いなる期待と激励の言葉でもあります。

皆さんのたゆまぬ努力の陰には、絶えず気遣いながら支えてくださったご家族や周囲の方々がいたことを忘れてはなりません。作家・大江健三郎氏が、「家庭とは、安心して失敗できる場所である」と述べています。まずは、無償の愛情でここまで育ててくださったご家族に、そしてお世話になった周囲の方々、仲間たちに、心より感謝の気持ちを伝えてもらいたいと思います。

この佳き日、本校を巣立つ皆さんには、これからの人生を「謙虚に生きてほしい」と思います。人は時として利己的で、他の意見には耳を傾けようとはせずに、自己主張に走ることがあります。知識を増やし技量を磨くことにより、自信をもつことは素晴らしいことですが、それを過信して、謙虚さを失ってはなりません。自己過信は、自らの向上心を枯渇させます。自らを虚にし、他の意見に自らの心の耳を傾けることが信頼に足る人につながると思います。

その一方で、この二十一世紀を生き抜く皆さんには、揺らぎなき信念とそれを相手に伝えつつ主体的に社会を改革する勇気、そして常に学び続ける姿勢を持ってほしいと思います。

本校が目指す生徒像には「他者と協働してよりよい社会を創造し支えることができる、力強く骨太な生徒」とあります。本校で学んだ高いレベルでの様々な学び、科学的、論理的思考力を活かし、深志高校で育まれた自治の理想を胸に、より良き社会の構築に主体的に関わっていってほしいと思います。

人類史に記録されるであろう東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故から、はや十一年が経とうとしています。

私にとっての復興の足音は、奇跡の一本松で有名な陸前高田市を訪れた際、耳にした、ガラガラゴトゴトと鳴り響く、土砂を運ぶ巨大ベルトコンベアーの音です。凛とそびえたつ松の木の後ろで、巨大なパイプラインの如く、山を切り崩した土砂が絶え

間なく運ばれ、海辺の地域を高台へと造成している光景とその音は忘れることができません。

東日本大震災が与えてくれた教訓を肝に銘じるとともに、戦後七十七年を経た今こそ、過去を正しく見つめ、現在を正しく認識し、今まさに国家のアイデンティティがぶつかり合う複雑な時代、二十一世紀を生きる主権者として、多様な人々とつながり手を携えながら未来への橋渡しをすることが、今を生きる我々の役目なのだと思います。

知識基盤社会と呼ばれる現代社会ですが、小林有也初代校長の言葉のとおり、現代の悪風潮に染むことなく「謙虚に」「信念を持って」「身体強健にして、学び続ける」人として大きく羽ばたいてください。旅立ちを祝して式辞にかえます。

令和四年三月四日

長野県松本深志高等学校長　　塩野　英雄